桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第６９号　　２０２４年６月１０日

発行　中部学院大学　中部学院大学短期大学部　宗教委員会　〒501-3993　岐阜県関市桐ヶ丘二丁目１番地　TEL（0575）24－2211

死にゆくあなたへそしてわたしへ

コリントの信徒への手紙Ⅰ　15章50節－56節

高木　総平（中部学院大学　宗教総主事）

去る５月14日に「死生学」の第一人者の鈴木秀子先生をお迎えして「キリスト教研修会」を開催することができました。この会へ参加した古川先生がこの紙面に感想を寄稿されていますのでお読みいただければと思います。この鈴木先生にこのご講演の演題を検討していただくために次の案をお伝えしました。1、死は人生で最も大切なことを教えてくれる 2、人はいつか死ぬのだから 3、死にゆくあなたへそしてわたしへ　結局先生のお考えで１に決まりました。ここでは３を念頭に置きながら、死について聖書の基本について述べることにします。

そのキリスト教信仰において、召天、死を考えます時、根本に甦りの信仰があります。と言いましても、死に対してすべてが明らかにされているのではありません。旧約聖書の創世記には、神話的な表現として、人は土のちりで創られたと書かれています。やがては土に帰ることを意味し、限りある命について語っていますが、このコリントの信徒への手紙には、体の甦りが述べられています。パウロという人の言葉です。これは、この体が生き続け、死なないということではありません。神とつながった命ということです。それをなしてくださる方への信頼が、大切だとここでは訴えています。死というのは、人間にとりまして、悲しい、つらい現実であることには変わりありません。また日本人の中には、死に対して、暗く怖ろしいイメージを持っている人もいます。この聖書では、「死のとげ」という表現をしています。そのような悪しきとげを取り除いてくださったということです。また罪の力は律法だと言っています。律法とは、人間が努力をして、実績や徳を積んで神の前に立つ生き方です。言い換えますと、この私中心の生き方、私の力で生きているという考えなのです。でも死を考えますと、死はそのような生き方を台無しにしてしまいます。

以前にいた教会のメンバーで旧讃美歌267番を結婚式で歌ってほしいと、当時の牧師さんに申し出た方がおられました。その牧師さんは本当にいいのですか？と問い返したそうです。歌詞をみると、「陰府（よみ）、死者の赴くところ」などの歌詞があり、結婚式ではふつう縁起が悪いということになるからです。それを選ばれた思いは、キリスト教の本質がそこにあると思われたからでしょう。３番に「陰府の長よ、ほえ猛りて　迫り来とも」　４番の「わが命も　わがたからも　とらばとりぬ」とあります。もう死には脅かされないと歌っているのです。それはイエス・キリストの復活により、すべてを台無しにしてしまうと思われ

ている死の悪しき力を無力にしたということです。死は確かにつらく、悲しいことです。しかし恐ろしい、暗いことではないということであります。終わりではないということです。言い換えると讃美歌のように、むなしいものにとらわれるのではなく、永遠なる御方に心を向けて、歩んで行きたいと思いますし、いつか神のもとでの再会を望むということがキリスト教信仰の根本なのです。

それが生きている限り必ず出会う「あなたの死」そして必ず訪れる「わたしの死」を受け止める根底であるのです。

死について　－患者さんからの課題－

堀 田 みゆき（看護リハビリテーション学部 看護学科 准教授）

私は、長年の臨床経験のうち 10 数年の間、神経難病の患者さんに関わらせていただくことが出来ました。ここで私が患者さんやご家族から「寄り添う看護」の教えを受け、私の一生の宝の時間であったといっても過言ではありません。

難病は、「原因不明、治療方針未確定、経過が慢性、介護等に著しく人手を要し家族の負担が重く、精神的にも負担の大きい疾病」と定義されています。神経難病の中でも筋委縮性側索硬化症の患者さんが多く、この病名と診断される人は 10 万人中 2.2 人と言われる中、通年で 150 名以上の患者さんと何かしらの関わりを持たせていただけました。

筋萎縮性側索硬化症の多くは、手足の動きが悪くなる、呑み込みが悪くなるなどの自覚症状から、病院を転々とし、どこでも診断がつかず専門病院を受診し初めて病名が分かる方が多いです。診断がつき、患者さんは「分かって良かった。」と、安堵されます。しかし医師からは病名宣告に加え、現代では治療法が確立していない難病であること、病気の特徴として進行が早く平均で約 2～3 年で、呼吸筋が動かなくなり人工呼吸器に頼らざるを得ないこと、人工呼吸器の装着については、装着するか、しないかを決めなければならない（病名告知）ことをお伝えします。それを伝えられた患者さんやご家族は「また崖に突き落とされた。」「病名だけしか頭に残ってなくて、頭が空白になった。」と安堵の境地から不安の境地に陥ります。

それ故、病名告知の前には医療者間で患者さんの社会背景、精神状態などを考慮し、どのように伝えるのがいいのか話し合ったうえで告知をします。1 度の説明で合点を得るのは難しいと考え、病名告知後の毎月ある外来受診への同席等、何度も何度も繰り返し患者さんやご家族の、お気持ちをうかがいました。そして患者さんやご家族と、何れ訪れる〝死〝についての話しもしました。私は、肉親の〝死〝を体験したことがなく、〝死〝について深く話し合った初めての経験が、患者さんでした。私が出会った多くの患者さんは、〝死〝は最後ではなく「〝死〝を迎える時までどう生き抜くのか。」を考えておられました。衝撃的な告知から、病状進行の度に何度も気持ちが折れ、それでも〝生ききる〝ことの境地に辿り着かれた患者さんの真っすぐな視線は、力強いパワーを放っていました。それを看続けていたご家族は、「誇りに思える父（母）です。」と尊敬の念を持ち、患者さんが亡くなった後、それに恥じない生き方をしたいと思われていたように、私は感じました。

〝死〝は、必ず誰にでも訪れます。〝死〝を考えることは怖いものではなく、必ず訪れる〝死〝だからこそ、その死までに、貴方はどう生きていきたいのか、どう生ききるのですか？と患者さんから課題をいただけたのだと考えています。

鈴木秀子先生をお迎えして

古川　秀昭（岐阜・生と死を考える会　会長）

93歳の鈴木秀子先生は、多くの場合死は怖いと考えられるが、実のところ死を迎える人はその直前には「美しさ」と「喜び」を味わうのだと原稿なしで休みなく約80分語られた。先ず講演の冒頭は、先生自らの臨死体験の話であった。

1977年奈良で開催された日本近代文学の学会に出席した際、夜中に旧皇室の別荘を改装した宿泊先の相当高い二階から落ちて意識を失ったのだ。先生はその時自分が二人いて、一人の自分は二階にいて、もう一人の自分は下で蓮の花びらに囲まれて寝ていたという。その花びらが一枚づつ落ちて、ついに最後の一枚が落ちる時に、二階の自分と下で寝ていた自分が完全に一体となる、すると時間の観念がなくなり永遠の中に立って、光に包まれた神のような像と会い、それまでの自分の過去のすべてが許される安らぎを経験したという。そしてその至福の世界から現実の世に戻る時に一番大切なことは「愛することと死すること」であると告げられ、そこで病院で目が覚めたというのである。

病院のベッドの現実の自分は、しばらくは二階から落ちた激しい痛みに襲われるのだが、この死の体験から人を愛することと死することにたずさわって生きるようになる。それからは死を前にしたいろいろな方に出会い、神さまは本当に死ぬときには「美しさ」と「喜び」を備えていて下さると知る。

例えば、ずーと孤児院で育ったトラックの運転手が交通事故にあい、意識もない死の間際に、ベッドに身を起こし「美しい、美しい」と叫んで死んだ。その時医師や関係者らから「彼はこれまで美しいと思われる生活体験はなかったはずだが」と聞かされた。

また別の財産相続で断絶していた姉妹の話をされた。その妹が死の床に就き先生にどうしても死ぬ前に姉に会いたいと伝え、それを聞いた姉が駆けつけ、二人は許し合って抱き合い、妹は姉の腕の中で喜んで安心して死んでいったという。

こうした話の中で先生は神は絶妙なバランスで世界を作っていると語る。晴れと雨、苦難と歓喜、生と死、ちょっとした手伝いや許し合う力を神は与えていてくださる。その神の愛がわかればそれが生きる力となり、命を成長させることになると説き明かす。

以上は5月14日(火)関キャンパス・グレースホールで鈴木秀子先生が語られた主な内容である。当日は中部学院大学キリスト教研修会と岐阜・生と死を考える会との共催で、両者が呼びかけた多くの学生と一般受講者が集い熱心に「死は人生で最も大切なことを教えてくれる」との演題に聞き入った。誰もが避けることができない「死」についての難題を平明な言葉と身近な体験の中から、それを乗り越える道を知って日々を生きるメッセージを聞くことができたのではないか。

2024年度　宗教講演会
「自分らしさ」の再考
～違いの中で共に生きる～
西南学院大学　チャプレン 劉　雯竹 先生

日　時：7月 1日（月）　11：10 ～12：20
（第 2 時限の講義は行いません。）
会　場：関キャンパス　11301 講義室

私たちの時代には、いろいろな流行りものがあります。ファッション、芸術、ことば、音楽など、人はそれらに影響を受けながら、自分なりの世界観を考え表現しています。もちろん、流行りものは時代とともに変化し続けるものです。ある髪型に対し、「昭和スタイルだね」と評価し、ある青年の言動に触れ「今どきの若者らしいね」と思い、職場や社会では今までのやり方・常識が通用しないことを認識するように、ある程度の影響力を持つ「流行りもの」は、「相対的なもの」であると言えます。

大学生活をスタートした皆さんは、周りからさまざまな影響を受けながら自己を形成していきます。新入生の場合、制服着用義務がなくなり、十人十色の世界がよりリアルに目に映ったことでしょう。学問の世界においても、多様な意見や見解と出会い、客観的かつ多角的な視点で物事をとらえることが求められます。答えは一つではないと気づきモヤモヤしたり、自分はどうあるべきか迷ったりする経験は、大学生活において一度はされることでしょう。

イエスの時代のユダヤ社会では、信仰や宗教の本質や在り方についてさまざまな議論がなされました。ある日イエスは「人々は、私のことを何者だと言っているか」と尋ねたところ、弟子たちは「『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます」と答えました。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問い続けると、「あなたはメシア、生ける神の子です」と弟子ペトロが即答し、その答えはイエスの本質に一番近いものだったのでしょう、「あなたは幸いだ」とイエスに認められたものの、「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」と知らされたのです。（マタイによる福音書 16 章 13～17 節（新共同訳）参照）

「あなたがたはどう思うか」と弟子の主体性を引き出すための問いであったのにも関わらず、なぜ神がその主体性を奪ったかのような、「これを現したのは私の天の父だ」という言い方をされるのか。物語の続きを読めば、ペトロ自身も答えの本質を理解していないことが分かります。この事実を知って物語を読み直す時に、完全に理解していなくても、イエスと本気で向き合ったがゆえに、答えが示され、「あなたは幸いだ」と励まされたのではないかと思います。

最近「自分らしさ」の意味を問い直しています。自分らしさって、個性なのか、こうであるべきという価値観や基準なのか、こうありたいという意欲の問題なのか、あるいは他人と区別するために、相手と違う何かを示すところにあるのか……自分らしさを言語化することは難しいかもしれませんが、人は本気で自分や他者、物事と向き合うところに「自分らしさ」が生まれると思います。

限られた環境や時代、限られた理解力でも、人生と本気で向き合って見出された、自分と他者の「答え」を認めつつ、互いに励まし合い共にこの時代を生きていきましょう。

◆プロフィール

劉（りゅう）　雯（ぶん）竹（ちく）（LIU WENZHU）

中国大連出身。
幼い頃、クリスチャンとなった祖母と初めて教会に通い始める。
2005 年、日系企業に勤め、近くの聖公会教会でバプテスマを受ける。
2006 年、日本へ留学。
2008 年、西南学院大学国際文化学部入学。
2010 年、同大学神学部に編入。
2014 年、西南学院大学大学院神学研究科修了。
2016 年、シンガポールバプテスト神学校神学修士修了。
同年、日本バプテスト広島キリスト教会の副牧師として赴任。
2018 年、西南学院宗教主事に就任、現在に至る。
趣味：読書、カメラ、ギターなど。